

## 初等音楽

音楽教育専修・田邊 隆

### 1. 授業の概要

この科目は「小学校教科科目」に属し、音楽科の常勤教員が13名前後の履修者を担当している。2年生後期の開講科目で、単位認定の条件として、基本の2/3以上の出席の他に、最終試験までに弾き歌い7曲以上の合格が義務づけられている。この授業を履修するにあたり、履修生の音楽経験を知る観点として、「楽器や歌唱の経験年数」「読譜力の程度」をあげることができる。その実態は例年同傾向を示し、1/3がピアノなどの経験を有し、1/3が簡単な楽譜（ト音譜表）なら読める、そして1/3が楽器演奏経験に乏しく、読譜も困難を感じている状態である。

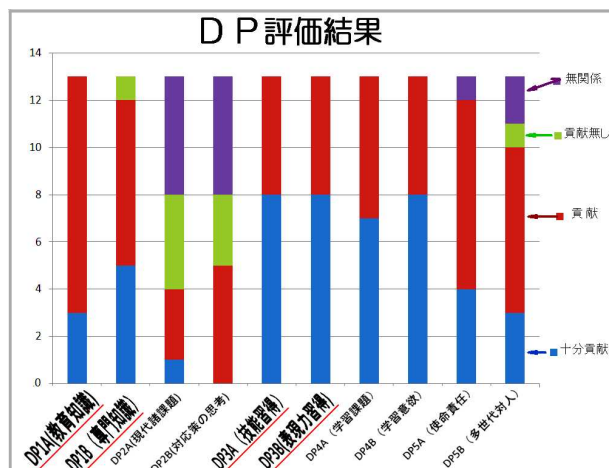
従来は通年で開講された科目であるが、免許法の改正で半期の履修となり、よりいっそう能率的な指導が求められる。特に、教育実習での授業実践の際に、伴奏や弾き歌いは避けられず、教員採用試験でもピアノ伴奏を課している場合が多いことから、音楽表現力の保証という観点は重要である。

今期は、TA（ティーチングアシスタント）を活用し、授業を行った。

#### 1) 目的・目標・DP

授業の目的は、小学校教員として身につけておくべき音楽表現の基本的な技術を修得する。到達目標は、小学校教科書掲載程度の楽曲のピアノ伴奏と弾き歌いができ、音楽を愛好する心を演奏を通じて表現できる。さらに本授業のDPは、(1A)教育に関する確かな知識と(1B)得意とする分野の専門的知識を修得。(3A)教育活動に取り組むため(3B)高い技能と豊かな表現力を身につけるを設定している。今期の結果は次表・次図の通りである。

DP	評価	十分貢献	貢献	貢献無し	無関係
DP1A(教育知識)		3	10	0	0
DP1B(専門知識)		5	7	1	0
DP2A(現代諸課題)		1	3	4	5
DP2B(対応策の思考)		0	5	3	5
DP3A(技能習得)		8	5	0	0
DP3B(表現力習得)		8	5	0	0
DP4A(学習課題)		7	6	0	0
DP4B(学習意欲)		8	5	0	0
DP5A(使命責任)		4	8	0	1
DP5B(多世代対人)		3	7	1	2



DP(1B)専門知識の「貢献無し(1名)」については、さらに実技面に限らず理論的な説明を十分に行って欲しいとの指摘と考える。

### 2) 授業の形態と方法

形態は、教員による講義・演習が2回、教員とTAによる履修生個々への対応（演習）が12回、最終試験と総括で1回、計15回で実施した。特に演習の方法については、次時の課題指示と履修生の事前練習の成果に対する確認、そして不十分な点に対する個別指導を行った。基本的な教材は、全員にシラバスで示した小学校歌唱教材を用いた。

また最終実技試験では、各人の演奏を動画編集し、希望する履修者へ省察用として配布した。

### 3) 授業外の学習

授業外の学習を判断する基準として、弾き歌いの合格曲数をあげることができると考え、おおよその基準（秀＝15曲以上、優＝12曲以上、良＝10曲以上、可＝7曲以上）と最終目標17曲を事前に具体目標として示した。

授業における最終的な分布は、次図のようになった。（個人が特定できないよう抽出表示とした。）

授業外学習は、履修者A・F・Bが⑥～⑨週ですでに目標（17曲）を達成し、残りの⑤

週以上は最終試験に向けた練習に専念するパターンである。Hは⑭週にわたり、コンスタントに目標達成を目指している。Jは最初の⑤週までに、従前の力で合格曲数を確保するが、次第に難易度の高い曲への挑戦を心がけるようになり、目標数には至らなかったが、質的な学習を心がけた例である。Kは、一般的な学習状況を代表する例である。このように、履修者の学習には、パターンがある。

履修者	A	F	B	H	J	K	平均合格曲数
①10.22	3	4	0	2	3	0	1.92
②10.29	6	2	3	2	1	0	1.85
③11.05	2	2	3	1	2	1	2.00
④11.12	0	0	2	2	2	2	1.62
⑤11.19	4	2	3	1	2	2	1.77
⑥11.26	3	2	4	1	1	1	1.46
⑦12.03	0	2	1	2	1	1	1.23
⑧12.10	2	2	1	1	1	1	1.38
⑨12.17	1	1	0	0	1	1	1.00
⑩01.07	2	0	1	0	0	0	0.54
⑪01.14	1	0	0	3	0	1	0.54
⑫01.21	0	2	0	0	2	1	0.69
⑬01.28	0	0	0	1	0	0	0.08
⑭02.04	0	0	0	1	0	1	0.15
最終合計数	24	19	18	17	16	12	16.23

(赤の数字は、目標達成17曲の時点を示す)

- 1型) ⑭週にわたり、質量ともに同じペースで学習するタイプ。(均等型)
- 2型) できるだけ早急に一定水準を確保して、その後に、時間をかけて試験曲に難易度の高い曲で挑戦するタイプ。(先手型)
- 3型) 到達度より難易度を優先する、量より質を追求するタイプ。(質重視型)

#### 4) 音楽経験と合格曲数の関係

有意確率 p < .05000 N=13	総合合格曲数	音楽経験			学習パターン
		(総年数)	(鍵盤)	(鍵盤外)	
総合合格曲数	1.00	.85	.73	.54	.50
音楽経験(総年数)	.85	1.00	.79	.70	.49
経験数(鍵盤)	.73	.79	1.00	.12	.60
経験数(鍵盤外)	.54	.70	.12	1.00	.10
学習パターン	.50	.49	.60	.10	1.00

#### ①合格曲総数と音楽経験の相関

音楽経験の総数との相関は ( $r=0.85$ )、鍵盤楽器の経験年数の相関は ( $r=0.75$ ) の順で強い相関が見られる。しかし、鍵盤楽器外の経験年数(吹奏楽・合唱等)との相関( $r=0.54$ )が、さほど強くないことが分かる。この授業科目の内容が、大学入学前の鍵盤楽器の経験差そのままに、総合結果としても表れた。

#### ②3種類の学習パターンとの相関

1型:均等型、2型:先手型、3型:質重視型の各相関を見ると、鍵盤楽器経験との相関( $r=0.60$ )以外、学習パターンとの関連性を見いだせない。換言すると、鍵盤楽器経験者は2型(先手型)の傾向がやや見られるが、全般として音楽経験の違いによる学習のパターンとの関連は見られない。

## 2. 今後の課題

### 1) 学習パターンへの対応

一律の目標設定ではなく、音楽経験に応じた目標設定が有効と思われる。履修者の音楽経験の相違を考慮し、次年度に向け、下記の試案を考えた。

#### ①音楽経験有(読譜可能な履修者)

最終目標を20曲とし、内訳は小学校関連の教材を17曲以上、加えて自由曲で目標を設定する。

#### ②音楽経験有(鍵盤楽器以外の経験者)

従来と同様な目標設定。

#### ③音楽経験無(読譜が困難な履修者)

理論と実技を有機的に関連させた個別指導を充実させる。TAの活用が望ましい。また小学校関連教材の前に、より平易な楽曲を用意し、鍵盤楽器に慣れることを優先する。

### 2) DP2(現代的諸課題)への対応

さらにシラバスで設定していないDPへの効果や可能性を求めるならば、教育実習の具体的な指導場面の提示を行い、この科目での学習が、実際の教育現場で用いられる意味を示し、意識化する工夫が必要である。

### 3) TA活用の授業運営

今回は、指導者とTAが同内容を並行して行ったため、多くの履修者が目標達成が出来た。これは量の面でかなりの効果であった。しかし、質的側面の改善を考えると、指導者とTAの役割分担を明確にすることで、いっそう効果があがるのではないかと考える。

具体案は、指導者の診断的評価を受け、TAが形成的場面で貢献し、最後に指導者が診断的評価を行う方法である。指導者とTAとの情報の共有はTA予算との関連もあり、課題も含まれるが、今後、工夫しつつ試みたい。